



世帯数 6,085 戸
人口 13,949 人
(令和3.7.1現在)

寿地区一周駅伝大会記録

令和2年第53回大会を以て中止、終了となった、寿地区駅伝大会を振り返り、その記録をまとめました。



第52回大会 選手宣誓：寿田川町会

【大会経過】

▼第1回大会（昭和43年）

明治百年記念・松本市制60周年記念の一環として、11月23日勤労感謝の日に寿一周駅伝大会（8区間13・6km）が行われたのが最初です。

当時は、赤木・小池・百瀬・

白川・白姫・上瀬黒・下瀬黒・竹淵・豊町・寿田町の10町会があり、白姫は不参加でした。

▼第4回大会（昭和46年）

赤木の諏訪神社上社前をス

タートとし、赤木線を北上、寿児童館を東へ曲がり、白川交差点を更に東進し、白姫公民館から牛伏寺川堤防道路を北へ、下瀬黒公民館付近から西へ向かい、竹淵公民館から赤木線を南進して寿小学校をゴールとするコースで、概ね各町会の公民館付近を中継点とし、11区間14・5kmのコースが確定しました。

なお、この年は、現寿台の6町会（寿団地1丁目・寿団地1丁目2・寿団地2丁目1・寿団地2丁目2・寿団地3丁目1・寿団地3丁目東）が寿地区に加入しています。

▼第5回大会（昭和47年）

この年は16町会中13町会が参加しました。

第1回より5年連続優勝した赤木町会と、5年連続して出場した選手18人への表彰も

行われました。

▼第6回大会（昭和48年）

この年の11月1日より、寿台連合町会が9町会でスタートし、寿に加入していた6町会が脱退しました。

▼第7回大会（昭和49年）

この年白姫町会が初参加し、10町会が全て揃いました。

▼第10回大会（昭和52年）

この年、10回大会を記念し、10年連続出場選手の表彰がありました。これ以降連続出場選手の表彰が慣例化されました。

▼第21回大会（昭和63年）

この年松原町会が初参加し、11町会が実施されました。

▼第22回大会（平成元年）

この年竹原町会が初参加し、12町会が実施されました。以降33回大会（平成12年）まで12町会で行われます。

▼第34回大会（平成13年）

この年寿田川町会が初参加し、13町会が実施されました。

▼第35回大会（平成14年）

この年松原町会が、寿連合町会から脱退して独立。現在の12町会になりました。

また、警察からの指導により、信号機のある交差点は通ることができなくなりました。コースが変更となりました。

▼第36回大会（平成15年）

この年から、白川道祖神付近をスタートとし、北六区の農地の中を走り、ゴールを寿公民館とする9区9・6kmのコースが設定されました。

また、名称も寿地区一周駅伝大会から寿地区駅伝大会へ変更になりました。

▼第47回大会（平成26年）

この年から、片丘線の横断回避のため、白川道祖神付近をスタートとし、北六区の農地を周回し、ゴールを下瀬黒公民館とする9区9・9kmのコースが設定されました。以降最終回までこのコースで実施されました。

記録集

① 大会回数

53回（内中止4回）

② 延べ優勝回数

- 14回 百瀬
- 9回 竹淵
- 5回 赤木
- 4回 白川 下瀬黒
- 3回 寿田町 上瀬黒 豊町
- 2回 小池
- 1回 松原 寿田川

③ 連続優勝回数

- 5回 赤木
 - 3回 寿田町 上瀬黒 白川
 - 豊町 下瀬黒
- それぞれ1回ずつ達成

▼第53回大会（令和2年）

この回は、新型コロナウイルス感染防止のため、中止となりました。併せて駅伝大会は終了となりました。



第52回大会スタート直後

最後に、大きな事故もなく大会を支えていただいた多くの町会役員・体協役員・安協役員・公民館関係者・そして多くの選手の皆様に熱く御礼を申しあげます。

また、令和3年からは、この駅伝大会に替わる事業として、ウォーキング大会が計画されていましたが、新型コロナウイルス感染防止のため、中止となりました。

【館報編集委員 清水寿雄】



第52回大会 優勝：百瀬町会

わがまち王徳寺《おうとくじ》

今回は王徳寺の中島住職から話を聴きました。

王徳寺は、松本市寿北(上瀬黒)にある真言宗智山派の寺院。本尊は大日如来と不動明王。山号は加擁山。小笠原家の菩提寺。室町時代尊栄和上により開創松本市指定重要文化財木造不動明王坐像―東国六体不動尊の一体で明応8年(1499年)の作。小笠原長持が「開運不動尊」と命名したとされます。小笠原氏は家名のもとになった「小笠原」の地名は甲斐国巨摩郡に見られ、小笠原牧や山小笠原荘があった現在の山梨県北杜市明野町小笠原と、原小笠原荘があった現在の山梨県南アルプス市小笠原に居館があったとされます。室町時代以降、武家社会で有職故実の中心的存在となり家の伝統を継承していったことから、時の幕府からも礼典や武芸の事柄においては重用されました。これが今日知られる小笠原流の起源であります。煎茶道や兵法などにも小笠原流があり、その起源は多様です。今日の研究では原小笠原荘が小笠原氏の本貫であったと考えられています。

本尊は信州中山開運不動尊と呼ばれ、密教の根本尊である大日如来の化身であると思われています。「不動さん」の名で親しまれ、大日大聖不動明王、無動明王、無動尊、不動尊などとも呼ばれています。アジアの仏教圏の中でも特に日本において根強い信仰を得ており、造像例も多く、真言宗では大日如来の脇侍として、天台宗では在家の本尊として置かれる事もあります。

木祠に入れられた子安地蔵があり、石工の姓が小笠原であることから、高遠系であると思われる蔵様のお顔や子供は風化のためか望洋とした感じですが、台座の蓮花は高遠石工らしく、丁寧に仕上げられています。その他石工孫右衛門作の六地藏があります。



【館報編集委員 宮川知也】

エピソードで綴る寿の歴史① 幕末、寿にいた蘭方医

文久元年(1861) 9月27日、百瀬知行所上瀬黒村医師吉田秀仙宅に10人程の強盗が刀を抜いて侵入しました。すきを見て下働きの女性が家を抜けだし隣家に知らせ、そこから名主に通報し、名主は番木を打って村人を起こし、村方が一丸となって騒ぎ立てたので「刀2腰、脇差1腰、銭1貫文程、羽織1、女帯1」を盗み取り早々に立ち去るといふ事件が発生しました。百瀬陣屋は村々に、翌日から夜回りを強化するように命じ、陣屋の下役も見回りを強化しています。11月13日になって、この盗品が松本の質屋から発見され、質入れ人を調べますが、畑で拾ったということ、それ以上の探索は行き詰まり、事件は未解決のままとなりました。

さて、医師吉田秀仙は元々百瀬知行所の住人ではありません。文化2年(1805)に松本藩奥医師、下条通春敬義の身元引き受けで知行所内に引越して来て上瀬黒村に住みます。通春の「札」には「この吉田秀仙と申す医師、拙者妻弟に御座候」とあります。松本藩戸田家の出自を記す「戸田家出身記」によりすると下条通春の妻は「吉田秀仙の娘」とあることから吉田秀仙の実家は医家だったと推定されます。そして、秀仙は百瀬陣屋に1人扶持で雇われています。1人扶持とは1人1日の標準生計費用を玄米5合として、1カ月に1斗5升、1年間に1石8斗、俵に直して米5俵(粃支給の場合は10俵)を支給することです。そして宗門人別改めは毎年2月15日、村人とは別に差し出しという形で行われています。秀仙は知行所内に起こる喧嘩で傷を負った若者達の診察や治療、村人の病氣治療にも当たっています。また、行き倒れ人の診察、投薬にも関わり、残された陣屋へ提出した容体書の記述から漢方医であったことが分かります。この吉田秀仙について、寿赤木出身の佐賀大学教授の青木歳幸氏著「在村蘭学の研究」によりすると、彼はこの事件が起きる前年の万延元年(1860)10月2日に美濃大垣の高名な蘭方医江馬活堂(春齡)に入門しています。この入門の仲介をしたのが、嘉

永3年(1850)に信州で最初の種痘を実施した洗馬村の在村蘭方医熊谷珪碩・その子謙齊でした。活堂から熊谷謙齊宛ての書簡には「吉田秀仙老、晩学に付き診察傍觀致させ早々治療稽古、出来候」とあります。すなわち、「秀仙は経験を積んだ医者であったので先ず、診察治療の様子を見学させ、すぐに蘭方医の実習をさせた」とあります。秀仙は文化2年に20歳と仮定しますと、この時65歳前後になっていたと思われる。秀仙が晩年になって蘭方医学習得を志した動機は分かりませんが、幕末、うち続いた、コレラや麻疹の流行に対し、予防や治療において漢方医としての限界を薄々感じていたからかも知れません。そして、新しい世の中になった明治6年には豊丘村上瀬黒に、西洋医学を以て治療に当たる「洋方医」として開業しています。また「寿小学校沿革誌」によりすると秀仙は寺子屋師匠も兼ねていました。そして、明治27年「大日本医会県下会員名簿」に「東筑摩郡 寿村 吉田秀仙」と掲載されており、この方は年齢から考えて秀仙の後継者と思われるます。

【寿史談会顧問 青木教司】